

消えた百文銭兜

かわぐちこきじゆがつしゆく

河口湖喜寿合宿



合戦に敗れ、敗走する

真坂泰顕、景謙の親子は

河口湖を渡り切れるのか

そして捲土重来は叶うのか

獅子の会

あおぬま まえやま くりぬま おおくぼ
青沼保雄、前山健吉、栗沼 昇、大久保一雄、

すはぎ すきもと そと よしはた
須萩俊二、杉本善弘、曾戸 寛、吉畑利男

伝承

まさかやすあき かげかね
真坂泰顕(まさかのたいけん)、真坂景謙(けいけん)

真坂家の家臣、河口湖村の長と村人

河口湖の竜神



ずいぶんと長い上り坂が続いた後、林の中を抜けるとようやく河口湖湖畔の古民家を改造したコテージに着いた。

「さっきの長い坂道を通ったとき、曾戸君にお世話になったあの夏が、しみじみと思い起こされたよ」

「ああ、あの坂道でバタ仲間自転車を俺の自転車でロープで繋ぎ引つ張ったのを覚えているけど、誰だったかは覚えていなかった。あれは前山だったっけ？」

高3の夏休み、富士伊豆一周のサイクリング旅行から60年。その仲間も喜寿を迎えた今、「富士伊豆CYC回顧合宿」と銘打つての河口湖一泊旅行が計画されたのだ。

あのとときの参加者は15名だったが、今回はさすがにサイクリングとはいかず、車2台に分乗しての参加者は、青沼、前山、栗沼、大久保、須萩、杉本、曾戸、吉畑の8名である。

合宿であるので、自炊、雑魚寝で行うことにしたが、本当の理由はみんな年金暮らし故の経費削減である。

一棟貸しの古民家なので、時代を重ねた佇まいを思い浮かべていたが、予想に反しお勝手や寝室は今風に改築しており、3台だけだがベッドも有る。

部屋の中で思いおもいに座ると、高3のサイクリングの話になる、クラス会などでは必ずといっていいほどこの話題で盛り上がる、最近では72歳で体験した「しまなみ海道サイクリング

同級会」の話題も定番になっている。

今回の発案幹事である前山が、諸々の折衝などのため管理棟へ出向いて行った。

「ベッドなんて久しく寝たことない、今夜はベッドに寝かせて欲しいな」栗沼が唐突に言い出した。

「俺、腰痛もちでえ：ベッドが希望なんだけど」

「実は僕も腰痛なんです：」と大久保と杉本が続いて言う。

「俺もベッドでないと眠れないんだ」須萩も言った。

須萩はベネズエラで長い移住生活をしていた。

正月にはまたベネズエラへ行くのだと、今も週6の警備の仕事をしている、今朝も日当18000円になる深夜の仕事明けだという。

ベッドは3台、希望者は4人、思わぬベッド争奪戦が始まった。

誰が言うともなく「貴重なベッドなので利用者は、別途千円支払う」こととなった。すると、急に栗沼が、利用を辞退すると言いだした。

「腰痛もち二人と、ベネズエラ人、俺が降りるよりないよネ」

しかし本音は、10000円が惜しいのである、栗沼は勤続30年のころ会社が倒産した、退職金も年金も雀の涙だ、今は町のうどん屋で下働きをしている。うどんを打つ技量も無いので、捏ねたうどん玉を足で踏むぐらいの仕事だから幾らにもならない。そんな訳で3人から集めた30000円を栗沼が、幹事の前山のところへ届けると出て行った。

そのとき、みんなが何か変？と感じた。

青沼がいらない！確かに到着して部屋に入った時は居た：居たと
思う？ 誰もがあやふやだ。

フロントに行く、トイレや敷地内を手分けして調べる、たが青
沼の姿は無い、まさに神隠しだ。

「携帯を試してみろ」誰かが言った。

「無理です、青沼君はスマホや携帯電話は持ったことがない。
持たない主義なんです」

冷静に杉本が言う、確かに青沼は、しまなみ海道サイクリング
の時も、皆とはぐれて、連絡を取るすべもなく、彼はその日の
目的地に本隊より数時間も先に着いていたという、独断先行型
のタイプなのである。

「この近くに、「消えた物が現れる」という神社があります、そ
こへ行ってみましょう」

老人大学に行っている杉本は、地域の民話などに興味を持って
いる、この地のこともよく調べてきたようだ。

「そんな迷信、信じるのか？」

「なんと言う神社だ、道は分かるのか？」
色々な声が飛び交う。

「困ったときの神頼みだよ」もう吉畑は今回持参した電動アシ
スト自転車に玄関に廻している。

吉畑は77歳の今も、軽キャン車の車中泊で日本中を旅し、ブ
ログを発信し続けている希少な元氣印の爺さんだ。

「道なんて聞きながら行けば何とかなるよ、スギちゃん行こう」
杉本も持参したアシスト自転車を取りに走る。

曾戸は管理棟に行き、前山とこれからの夕食などの段取りに
ついて話し合っていた。

「年寄りになると、信心深くなるのかねえ。失せ物が見つかる
という神社に飛んで行ったよ」とニコニコしながら青沼の件を
前山に話している。

曾戸は、高校時代から、喜寿の今に至るまで、何かやる事ごと
にまとめ役である、物事に動じない。(青沼のことだ、散歩でも
してたと、ヒョッコリ戻ってくるさ)どつと構えて居る。

前山も曾戸の話に安心したように話題を変えた。

「そうそう、さつき栗沼が、ベッド利用代だと3000円持っ
てきた、ちょうど地元の農家さんが、葡萄を売りに来ていてね。
2500円だったのでそれに当てたよ。」

5000円のお釣り返したけど、3人じゃ分けづらかったかな」

部屋にみんなが集まると間もなくして、吉畑と杉本に引かれ
るように青沼が戻ってきた。

「すぐ近くの神社に居たよ、散歩に行ったんだってサ」と吉畑。
(やっぱり、な)曾戸は安堵しながらも笑みを浮かべている。

「心配させたようでスマヘン、逆さ富士の見える所がすぐ近く
だと聞いたので、ちよつと行ってみたんだよ」

「逆さ富士は見えたのかい？」

「見えた！凄く綺麗だったよ、ただ、その後はどう歩いたのか全く判らなくて、気付いたら神社の境内にいたんだ。キツネに化かされたような気分だった。そこへ二人が来たのでほんと助かったよ」

「杉本、なんていう神社だ？」

「確か、ケイケン神社と言って、逆さ富士を拝んだ後で、その神社にお参りすると、探し物が見つかるという神社だと書いてあった…その神社だと思う」

そんな謂れの神社がこの近くに在るのだとみんなが感心していた。と、その時、今まで黙って聞いていた大久保が満を持したように立ち上がった。

「いやいや、後でみんなに聞かせようと思っていたのだが、青沼君がすでに神社を訪れたとあっては、もう喋らなくてはならないナ。」

私がこの日のために調べた「失せ物探しに靈験あらたかな竜神社こと景謙神社」にまつわる言い伝えを「披露しよう」

大久保は舌癌の手術をしたこともあり、活舌があまり良くないのだが、この時は何のその…用意したメモを広げると、なんとも饒舌に、まさに立て板に水のごとく語りだしたのだ。

.....

『戦国の昔、この河口湖のむこう側、富士を背にした地に真坂

泰頭という武将がいた。

北の隣国との戦は、笛吹峠付近で激戦となったが大敗、雨の中敗走しこの河口湖近くまで来たが、従う将兵は既に十人を欠いていた、みな手傷を負い、特に嫡男の景謙は深手であった。

「父上、私は足手まとい、私を置いて先を急いで下さい。私はここで追っ手を向え打ち、時を稼ぎます。どうぞご武運を…」
「何を言うか景謙、この湖(うみ)を越えれば居城はすぐじゃ。何としても生き延び捲土重来を果たそうぞ」

景謙を叱咤しつつ、泰頭は両手を合わせ眼下のわずかに見える湖面を睨んで祈った。

「湖に棲むという竜神様、どうか我らに、今一度の武運を与え給え」

願いが通じたか、泰頭には、湖上に現れた大きな竜が、己に呼びかける声ははっきりと聞こえた。

『真坂泰頭よ、これより富士見の渡しに向え、そこで夕日に映える富士を拝める事が出来れば其方に武運は残る。そこにある小舟で湖を渡り切れば、必ずや再起の機会が訪れるであろう』

降り続く雨で霊峰富士は雲に覆われている、夕日に映える富士など見えよう筈もない。しかも追っ手は迫っている、泰頭には躊躇する暇はない、一同を鼓舞し湖岸を目指した。

富士見の渡しに着いた泰頭は愕然とした、夕映えの富士は無論、頼みの小舟も無い。竜神は我に試練を与えているのか。

泰頭は再び湖面に向かい手を合わせた。

「竜神様、この敗軍の将に何をお望みでしょうか。どうか一艘の小舟だけでもお与え下さい」

再び泰頭に竜神の声が響いた。

「泰頭よ、今お前が一番大切に行っているものと小舟を交換しよう。お前にその覚悟はあるか」

「何なりと差し上げます」

そう泰頭が手をつきひれ伏すと同時であった、水面に夕日に映えた逆さ富士が映し出された。渡し場には小舟が一艘繋がれている。

富士を見上げると、雲に隠れたままその姿はない、なのに湖面には夕映えの富士が映っている。この摩訶不思議な光景を思案している暇はない、まず瀕死の景謙を乗せ、次々に全員が乗り込むと舟縁迄水が迫る、対岸まで耐えられるのか危ぶまれる。

湖上を進む小舟の上で泰頭は考えていた、とっさに大切なものを差し出すとは言ったが、何を差し出せばいいのか…。

（そうだ、兜にしよう！この代々伝わる家宝ともいべき百文銭の兜だ）

この兜は、泰頭の曾祖父が一介の郷士であった頃「百文あれば国盗りは出来る」と百文を手に郷（くに）を飛び出し、苦難の末に一国の城主となった時に作った兜で、一文銭に百文の文字をあしらった前立てのある兜だ。

代々嫡男に引き継がれて、この戦には景謙が着け出陣した。

小舟は皆の重みで水が舟縁を超え始めている、一刻の猶予もない、早く対岸に着きたい、泰頭は叫んだ。

「景謙！百文兜を湖に投じよ」

返答がない、泰頭はもう一度「景謙！」と呼びかけながら振り返った。

小舟の中ほどに居たはずの景謙の姿がない、当然だが百文銭の兜もない、誰もが目を疑った。

確かに先ほどまで、吐く息も荒くここに横たわって居た、もちろん入水などしようものなら誰もが気づく、なのに消えた？

泰頭は一同を制し、低い声で言った。

「竜神様がお連れになったのじゃ：儂の一番大事なものを」

景謙の分だけ軽くなった小舟は浮き上がり、沈没の危惧は去り無事対岸へ着いたのである。

それから一年、再起を果たした泰頭は、川口湖周辺の領土の奪還に成功し、あの「富士見の渡し」に居た。

村の長が泰頭に目通りを願い出て、恐れながらと進言した。

「昨年の戦の折、この先の小高い丘に若武者が息絶えておりました、ご立派な出で立ち、兜には真坂様旗印の百文銭の前立。

これは御屋形様のご縁ある方かと、丁重にこの地に葬りました。

兜は我家で密かに預かっておりました。どうかご検分下さい」

泰頭は、嫡男景謙に間違いない、と村長（むらおさ）の手を取り手厚く葬ってくれたことに何度も何度も礼を述べた。

そして、差し出された兜を我が子のように抱き締めたのだった。

「はて、兜に百文銭の前立てがないが？」

「はい、葬った塚の石に兜を被せて置いたのですが、不思議なことに、気付くと前立ての百文銭が消えていました。

村人の中に、大きな竜が前立てを掴んで湖に潜るのを見たという者がおりました。

さて、これは敵兵に真坂家の者の墓と覚られぬ為の、竜神様のお示しかと、兜を我家に持ち帰ったのでございます」

そののち、泰頭はその丘に、竜神をご神体とする「景謙神社」を建立し、村長に広い社領を添えて官司の職を与えたという。

今でも、失せ物探しの竜神様と住民に親しまれている』
.....

額の汗をぬぐい大久保の長い景謙神社の伝承話が終わった。

パチパチと拍手も起こる中、前山が箆に入った葡萄の房をみんなに配りながら言った。

「大久保さんよく調べましたね、ご苦労様でした。

夕食はバーベキューです、その前にベッドを利用の3人からの差し入れの葡萄を頂きましょう」

「3人でお釣りの500円を上手く分けられたかい？」

曾戸の問いかけに、栗沼が慌てて答えた。

「前山から500円返されたが、3人に500円返しても、困ると思つて、俺が200円頂き自販機のジュウスを飲ませて

らつた、ので、3人に一人100円ずつ返したんだよ。ゴメン」

「ジュウスはいいんだけど、使つたのは200円だけ？」

杉本が、ちよつと不思議そうな顔で尋ねた。

「うん、200円ちようだよ」

「さつき僕もお釣りもらつたけど、3人が100円返してもらい、一人900円だよね、3人で2700円。栗沼さんが持つ

ている(いた)のは200円。2700+200=2900円だよね、3000円持っていた筈だけど。あと100円はどこにいったのかなあ？」

「前山さん、栗沼さんが持つて行つたのは確かに3000円？」

「栗山さん、自販機は200円だよね」二人とも確かだと頷く。

「いやいや、俺はとつてないよ」栗山一人が叫んでいる。

百円が消えた！ いつとき部屋の中が静寂な空気に包まれた。

その時だ、青沼が思い出したように言った。

「そういえば、さつき神社の境内で100円玉を拾つたよ。

お賽銭箱に入れちゃつたけどね、それが消えた100円玉だったのかな？ いや、そうだよ。竜神様が出てくれたんだ」

「よし、俺も明日の朝、逆さ富士を見てから、神社に行つてみよう、どこかで十万円無くした人がいるかもしれない、その金

が：神社に出てるかも：それでベネズエラだ！」と須萩。

みんなの笑い声がドツと広がった、かくして喜寿合宿の夜が始まったのである。

百円のゆくえは、竜神のみが知っているのだろうか……。 (完)

